

# tam tam

2021.5

VOL. 10

P1 [特集]「“帰ってこいよ”と言えるまち」と住民主体の地域づくり

P2 [特集]移住促進の成果と課題  
変化に対応できる地域づくりの支援P3 隣の自治協さん「上久下地域自治協議会」  
丹波市民、学びの窓「地域福祉は住民同士の支えあい」P4 繋ぐ!市民活動「805たんば サポーターズクラブ」  
活動事業者紹介「わかさ生活」SPECIAL FEATURE  
今号の特集

## 「“帰ってこいよ”と言えるまち」と住民主体の地域づくり



昨年12月に就任した林市長が掲げる「“帰ってこいよ”と言えるまち」。言葉だけ捉えれば、Uターン者などの移住者を増やしていく言葉に聞こえるかもしれません。

この言葉には「移住を促進し、人口増を目指す」ことに留まらず、人口減少・高齢化の進展、そしてコロナ禍や気候変動の影響で、地域が大きく変わっていく中でも、それらの「変化を受け入れ、適応していくためのまちづくり」を進めていくという思いが込められています。住民・地域・事業者・行政が力を合わせて「“帰ってこいよ”と言えるまち」を目指すことは、私たちが住むこのまちが、賑わいがあり住みやすくあるための取組です。

そのためには、市役所の各部署が連携し取り組んでいくことが不可欠であることから、4月の組織改編でその司令塔の役割を担う「ふるさと定住促進課」が設置されました。

「帰ってこいよ」という言葉の主語は、私たち1人ひとり。「帰ってこいよ」と誇りを持って言えるまちとは、1人ひとりの「こうあってほしい・ありたい」が丹波市で実現できることです。これはSDGs\*に掲げる17の目標や、「丹波市まちづくりビジョン」に描くまちや暮らしの姿とも重なってくるものです。

「仕事」、「子育て」、「住まい」、「賑わい」、「福祉」、「医療」、「教育」、「環境」・・・ありたい暮らしやまちの条件、重視することは、1人ひとり異なります。

では、1人ひとりの思いが叶えられるまちに近づけていくためにはどうしていくのか、誰もが住みたい・住み続けたいと思えるまちにつなげていくにはどうしていくのか、今回の特集は住民自治・住民主体の地域づくりの視点から、そのことを考えるきっかけにしてみたいと思います。

\*SDGs：国連加盟国が2016-2030年の間に達成すると掲げている「Sustainable Development Goals（持続可能な開発目標）」の略称。



丹波市市民活動支援センター

TAMBA CITY CIVIL AND COMMUNITY ACTIVITIES CENTER

## Topics 01 これまでの移住促進の成果と課題から考える、住民主体の地域づくり

丹波市の移住促進施策（平成 27 年度～）は、住まいや仕事とも密接に関わることから、これまで建設部や産業経済部が担当し、移住相談窓口や空き家バンクの運営などに取り組んできました。当初から重視してきたことは、住まいや仕事のマッチングだけでなく、移住者と地域とのつなぎ、調整、相互理解の支援などの丁寧なコーディネート。結果、コロナ禍もあって地方移住のニーズが高まっている中、実際の丹波市の移住相談窓口を通した移住人数は 24 人 14 組（平成 27 年度）から 101 人 50 組（令和 2 年度）と増加、一定の成果も見えてきました。

一方で、コロナ禍にあって仕事が少ないこと、移住希望者に適当な住

まいの流通が少なくなっていることと合わせて、移住前後の地域や住民とのコミュニケーション・相互理解も依然として課題となっています（たんば“移充”テラス「TurnWave」による）。

これらの課題をふまえると、これから住民主体の地域づくりには、地域の特徴や資源をもとに、「こんな

人に住んで欲しい」という発信ができる“呼びかける力”。そして、移住者に限らず、多様な人たちを受け入れ、その人が望む暮らしや地域を実現するための環境（住民自治の仕組み・活動や住まい、住民意識など）を用意できる“受け入れる力”が求められているのではないでしょうか。



移住者と地域のみなさんとの交流



移住者受け入れにむけた地域へのヒアリング

## Topics 02 変化に対応できる地域づくりへの支援

「“帰ってこいよ”と言えるまち」には、お互いを認め、誰もがさまざまな形で地域づくりに参加でき、楽しむことができること、そして、地域の良いところを伸ばし困ったことはお互いに支えあい、解決できる地域の仕組みが必要です。センターでは、そのための自治協議会・自治振興会や自治会などの住民自治組織や活動について、地域のみなさんが改めて考え、話し合い、つくっていくことができるよう、移住定住や地域福祉など関連する部署・組織と連携した支援に取り組んでいます。

例えば、神楽地域は 3 月に、センターも一緒になってこれからの集落や自治振興会の組織や共同作業について考え、話し合うきっかけとして「研修」を実施しました。今後も継続

して自治会単位で話し合いを続けていく予定です。また、柏原地域では、社会福祉協議会が支援する「支えあい推進会議」において、住民同士による勉強会のワークショップ（災害協力シミュレーションゲーム）に関わりました。

他にも佐治地域でのこれから支えあいを考える住民アンケートの企画や分析・検討の支援、芦田地域の地域づくり委員会の運営・話し合いの

支援に取り組んでいます。

地域が大きく変化している今、私たちが住みやすくあるための「“帰ってこいよ”と言えるまち」づくりに向けて、私たちの集落や地域をどうしていくのか、自分たちで考え、話し合い、変えていくことができるよう、市民活動課とセンターでは現在、重点的に「地域力アップ事業」として地域に寄り添い、伴走する支援に取り組んでいます。



神楽地域での研修



柏原地域支えあい推進会議ワークショップ

# さ ま ま 自 隣 り 協 の

TONARI no  
JICHIKYO san

上久下地域自治協議会

## 太古のロマンと未来に夢広がるかみくげの郷

上久下地域自治協議会は、山南地域東部の上久下小学校区に位置し、人口約1,300人、約540世帯、8自治会で構成されています。丹波篠山市と丹波市にまたがる篠山層群があり、2006年8月に地元の地学愛好家が日本最大級の恐竜「丹波竜(タンパティタニス・アミキティアエ)」を発見し一躍有名なりました。発見の翌年から開始した長期発掘調査も終わり、現在でも自治協議会の「上久下恐竜の里づくり部会」と地元の企業団体「元気村かみくげ」が連携しながら、化石発掘体験などを実施しています。また、自治協議会が継続的に実施している化石発掘調査により、世界一小さい恐竜卵化石「ヒメウーリサス・ムラカミイ」も発見され、ギネス記録にも認定されました。

## 世界的な技術を地域で学ぶ

2020年12月にユネスコ無形文化遺産に木造建築物を受け継ぐための伝統技術として檜皮葺き(ひわだぶぎ)が登録されました。檜皮葺きとはヒノキの皮を何枚も重ねて作られる屋根のこと、飛鳥時代から日本にあった伝統的な技法です。上久下地域では、質の良い檜皮が取れることや農業ができない冬場に屋根葺き仕事をする職人さんが多かったですことから、今でも地域の産業として引き継がれています。自治協議会でも登録に合わせ、「ひわだの里かみくげマップ」を作成、市内の小学生全員と上久下地域全体に配布しました。また11月には檜皮葺きの最初の工程である原皮師(もとかわし)による檜皮採取の実演や、檜皮葺きに関する勉強会も実施しました。今後も継続して勉強会を行っていく予定です。自治協議会の野垣会長は「地域に根付く世界的な技術を地域住民にも学んでもらい、地域に誇りを持って豊かな心で生活をしてもらいたい。」と語ります。

丹波竜の里と合わせて檜皮葺きの里としても、地域にある世界的な技術を絶えさせないようにこれから地域で活用し発展させていくことが次の目標になっています。



檜皮葺きの実演



旧友井家住宅での講演会

## 丹波市民、学びの窓

### 地域福祉は住民同士の支えあいから

「日本人は助け合いが苦手」。昨年開催したTAMBA地域づくり大学の講師の1人、田中義人さんの言葉です。講座で示された長野県のある町のアンケート調査では、「目の前に困っている人がいたら?」という問いに95%の人は「助ける」と答えましたがそのうち、「頼まれたら助ける」が72%で、「あなたは困った時に“助けて”と言えるか?」という問いには、「言える」はわずか5%だったということです。日本人は困りごとについて、特に他人には相談できずに自分で完結しようとする人が多いのではないかという示唆がありました。

日本では少子高齢化に拍車がかかって、丹波市の生産年齢人口(15歳~

64歳)減少率は全国平均の15年先を進んでいる状況です。5年後には65歳以上の高齢者1人に対して生産年齢人口は1.4人を切る計算になります。さらに、単身世帯の増加、晚婚化、ダブルケア、介護離職、引きこもりの中高年化、8050問題、生活困窮、自殺など地域の抱える課題もあります複雑化・複合化しています。

丹波市では第3期地域福祉計画に基づき、地域で助け合い、支えあうコミュニティづくりとして地域の生活課題を話し合う場となる「支えあい推進会議」を各小学校区などへの設置を進めています。この会議では、日常生活で支援が必要な高齢者などを地域でどのように支えあうのかを話し合い、課題の分

析や自助互助の関係づくり、生活支援活動の創出などを目指しています。

田中さんは講座の中で、「地域福祉は地域の住民をつなぐ基軸となり、支えあいは地域社会を再生します」と語っていました。困った時に困ったと言える関係を考えると、「支えあい」という言葉はこれからの地域づくりに欠かすことのできないキーワードになります。



柏原地域支えあい推進会議



繋ぐ!市民活動

## 805たんば サポーターズクラブ

地域に根ざしたコミュニティ FM 放送局として、丹波市にはたんばコミュニティエフエム（愛称：805たんば）があります。運営は、特定非営利活動法人たんばコミュニティネットワークが担い、多くのボランティアによって支えられています。そのボランティアの力を結集し、「805たんばサポーターズクラブ」が結成されました。

サポーターズクラブでは、番組の企画運営やパーソナリティ、技術スタッフもボランティアとして担っています。入念な準備を経てラジオを通して皆さんに声を届け、雨の中でも送信アンテナのチェックに駆け回ります。関わり方も多岐に渡り、領域、

活動時間帯が違うとボランティア同士の接点が少なく、情報共有や技術向上の場を作ることもサポーターズクラブの役割の1つです。

また、リスナーも輪の中に入ることができます。「コミュニティFMは身近だから意味があり、そのために丹波の言葉で放送している。丹波が地元であることを誇りに思ってもらい、地元のラジオをどんどん活用してほしい。」とサポーターズクラブ代表の足立晃一郎さんは話します。2020年2月には交流会を開催し、ラジオを通して人が集う楽しみを分かち合いました。コロナ禍で集まりにくいからこそ、ラジオの力が問われているかもしれません。



ボランティアで支える番組放送



スタジオを飛び出して放送準備



### 活動事業者紹介

## 株式会社わかさ生活

1998年創業のわかさ生活は京都市に本社があり、目の総合健康企業としてサプリメントや食品、書籍などの販売をしています。広く社会に貢献できる企業を理念に掲げ、2014年の丹波市豪雨災害時には多くの従業員が復興支援活動を行いました。丹波市は代表の角谷建耀知さんの出身地。長年続けてきた様々な地域貢献活動をもとに新たな事業が始動しています。

わかさ生活は2005年から丹波ブルーベリー研究会との協働で、丹波産ブルーベリーの研究と普及活動に取り組んできました。現在では丹波市内の収穫量は年間2トンを超えて、わかさ生活の鍬田茉南未さんは「市場では丹波産ブルーベリーはブランド

品、ニーズが高いですよ。」と話されます。今夏には研究を目的としたわかさブルーベリー農園が春日町柚津にプレオープンする予定です。地域住民や働きづらさを抱える人などにも農園管理に参加してもらい、新しい丹波産ブルーベリーの品種を目指した品種改良の研究を行っています。

この4月にはウェブサイト「ブルーベリーのある生活」をオープン。苗木などの販売と共に、わかさブルーベリー農園の情報や、ブルーベリー狩りができる丹波市内の農園を紹介するページもあります。地域住民も参加できる地域ブランドの創生や観光情報の発信を通して、地域の活性化に地域住民と共に取り組んでいます。



丹波ブルーベリー研究会の説明で農地整備に参加する地域の方々



わかさブルーベリー農園のブルーベリー



## 丹波市市民活動支援センター

TAMBA CITY CIVIL AND COMMUNITY ACTIVITIES CENTER

〒669-3467 兵庫県丹波市氷上町本郷300 丹波ゆめタウン2階 丹波市市民プラザ内

TEL 0795-82-8683 MAIL ccac@tamba-plaza.jp

開館時間 10:00 ~ 18:00 (会議室は21:30まで) / 休館 毎週月曜日・12月29日~1月3日

<https://www.tamba-plaza.jp/ccac/>

### 【情報誌へのご意見募集】

「たむたむ」についてみなさんが  
のご意見、ご要望をお待ちして  
います。役立つ情報紙を一緒に  
作っていきましょう。